
カフェオレと空

猫離脱

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カフェオレと空

【Zマーク】

Z6658C

【作者名】

猫離脱

【あらすじ】

見上げた空、色はまちまち。水平な田線、ふたり、ひとつ。やら
ゆらゆれているが、いずれ落ち着く。

白くて四角い部屋の入口に観葉植物。向かつて正面に大きな窓があり風が吹きこむ。注意してドアを閉め丸椅子に座る。この部屋がサイコロなら入口のドアが2で2の裏は確か5、3と4が対で6が本と薬の棚、対してはこの先生か。

「いいから。ひとりで行くつて、それが条件」

朝っぱら母親に起こされたのが0930 「ご飯を食べなさい云々のやりとりがあつて今日は電話で予約も入れたからと絶対連れて行くんだからの話。恥ずかしいも何もなく最高に引っかきまわされそうだつたので観念した。

家族で飯を食うのが嫌だつた。いつからかだが思い出せない。食卓を囲んで自分の話題がでるのが嫌いだつた。いかにも平和でじくあたり前のような光景が場に展開されると我慢がならなくなり黙つて飯をかゝ込むよくなつた。食事は5分ですませ、自分の部屋に入る。機嫌が悪いときは声も聞きたくないので自分の分の皿を取り部屋で食う。ほつとした。食卓で自分の話題が出るぶちきれ、テレビを観ながらあーでもないこーでもない、でどうだっけと振られれば、よくて、さあ。とか、ああ。とか言うだけで通常は無視。自分の言い分としてはこうだ。親は子のいうことなんて聞かない。聞かなくていいと思ってる。子の言つことは愚かな事で笑い事だ。まあそこまでは思わないでも子はいつまでも子で自分はいつまでも親だ

つてことであたりまえだ。でも、腹が立つ。俺がたまに話すのはそれが好き。とか、～したい。とかいう前向きなことではなくて、～は嫌い。とか、～はいやだ。とかいうくらい。それはそのまま俺自身に繋がっている。やりたいことの一つよりやりたくないことの十九を探して迷ってる。言い訳をしているんだ。で、この前まともに母親と話したのは、カレーのときにみそ汁をいつしょに出すのはやめてくれって言ったのを思い出す。確かに過去2度ほど言ったような気がするのだが気にも留めないのだろうか。カレーのときにでもみそ汁はみそ汁で出すんだというような母親の主張を見せつけられているようで腹がたつた。こんな事の積み重ねが俺を無言にさせんだと思いつつカレーもみそ汁もテーブルクロスごとひっくりかえさないだけましだると俺は飯を前に見えないためいきをつく。

田の前の現実。不満の前に、嫌なことの前に、片付けておかなければならぬ問題。久しぶりの外出。人との折衝。それなりにうまくやろうとしている自分がいる。名前を聞かれれば答えなくてはならないし、汚い格好もできない。笑われたり馬鹿にされたくもない。普通であること。普通よりちょっと劣つてもいいがそれもちょっとだ。主張はカレーにみそ汁云々。少しでも、わづかなところでもわかつてもらえば成功か。奈由多は丸椅子をゆっくり回転させーを待つた。

「それでお母さん。奈由多君がいわゆる引きこもりはじめたのはいつ頃からですか」

子供がとくに男の子が引きこもりもしくは不登校になる最大の原因は母親にある可能性が大だ。まして相談にきたのも母親。この母親は教育ママタイプ。息子に対する自分の教育についての自負と不安の同居。この手の母親の息子はやっかいだ。会つて見ないと想像

つかない。まだ甘やかし放題やりたい放題で育つてきた子の方がわざりよいと自分はみている。おそらく父親は仕事で夜遅く帰つくるんだろう。父親の無関心。自分が任かされているんだという責任。自分なりの努力。どうしてうまくいかないんだという息子へのいらだち。気の毒ではある。同じ女としては。家庭の問題。父親と良く相談してください。とはいかない。ここでは父親役を買ってでなければいけない。それを売つているのだから。理でもだめ。力でもだめ。

・・・それなら魂で。透は言うだろう。気楽なもんだ自分のことは棚に上げて。でも本質をついていると自分に思わせる自分が正解じゃあないかと思わせる事を簡単に言ってしまう。それが憎い。する。香摘は喧嘩したときの言い合いでそのことをいつも指摘するのだが、この母親と父親もそうなのだろうか。そして自分たちもいづれこうなるのだろうか。

常に自分の身に置き換えて相談内容を考えるのは悪いことではないと院長には言われている。吉本香摘25歳。独身。彼氏と同棲中。でその彼氏が中西透29歳。大手商社勤めの会社員。サラリーマン。同棲2年で結婚のケの字もでないのはかなりやばいと思つていては私だけつて私しか事情はわからない。本当に世の中わからないことだらけ。こんなことといえばそつだねつて返してくるのが私の彼氏。で、透の後押しを受けて魂の救済をするまでに至るかはともかく。

「まずは奈由多君にあつて話を聞かないことにはどうしようもありません」

「お母様もお仕事とか、ご家庭の事とかお忙しい中、何度も参られましても、私どもといたしましてはやはり本人と直接話さないことは何の解決にもならないかと思いますが」

「ええ。はい。私の気の迷いであつたらいいんですけどこの今まですけど息子がなにかその、取り返しがつかないというか、駄目というかその、」

「ええ。ダメですね。私はいつも思う。カウンセリングがしたくないと。お願ひだから自分たちで解決してくれと。なぜ家族の込み入つ

た、赤の他人の事情に口出ししなければならないのかと。言いたくないのだが、言いたくなる。仕事だから。ぼそっとした透の言葉が聞こえてくる。仕事。仕事。仕事。仕事だからできる。仕事だから何でも出来る。仕事でなきややらない。なんとか正当化にこぎつけて気持ちの転覆を回避する。この母親の気がすめばそれでいい話なのかもしないと、話を聞くだけ聞いて、整理して。

「それでは次回お母様とごいっしょでかまいません。息子さんの方、ご都合つきました時でかまいませんのでご連絡いただければこちらで本格的なカウンセリングの調整をはかりますので、今日のところは

なにが本格的なカウンセリングなのか、最後のほうは言つていることがちんぶんかんぶんのような気がしたがまではお引取りになつてもらつてほつとした。

特養老人ホームから引っ越してきて3年。所長はそそそりキミこそ患者を持つてもらおうと今回の担当にまわされたわけだが正直困ってしまう。心の底から本音で向き合えばわかってくれる。いや、わかってくれるというのはおこがましいが、香摘君駄目でもともど。よくなれば、その患者が望むようになれば良い訳で、そのままならそのままの状態でいいんだ。あやまればいいわけだから。ダメもとですよ。ダメもと。所長はそういうが、どうだろう。あーもういい。今日はがんばった。よくやった。早く帰りたい。久しぶりにコンビニに行つて新発売のケーキとアイスを買って帰りましょう。かえりましょう。そうしましょう。と、歌を作つて残りの終業時間を乗り切つた。

「よつ」

コンビニで立ち読みをしていると今日はいないと思つていたバイトの弟に後ろから肩をたたかれた。アルバイトとはいえた店員が、姉といえ客に、こんなにも気安く声をかけるなんて、他の客もいるで

しうが。と、なにか言つ前に携帯がぶーぶー鳴り出した。

「おっ。彼氏か」

「直」

開くと弟からでバーかと、あつた。無言で足を踏みつけお皿のケーキとアイスをとはいえ店員に押し付け店を出た。

「ねーちゃんまけるからゆるして」

つてできるわけないでしょあんたに。出来たとしても結構。久しぶりにくればこの調子だ。まあいいけど。今日はたまに会いにきたんだから。しつかし昔つから直樹は。まあ、いい。まあいい。階段を上る。アパートに入る。バランスはとれていると思う。私の周りの男達。直感的にそう思う。複雑な家庭環境が引きこもりや犯罪者をつくるといわれている。それでいえば私と姉。私と母がそれにある。弟と父とはなんとなくだ。なんとなくどうしようもないが分かり合えるような気がする。しかしお姉ちゃんと母は異質だ。もうわわたしをそう思つているもかもしれないが、なんで女で私がひとりこっちなのって考える。母はいわゆる美人で姉はまさに母似だ。わたしは、私的にまあそれほど悪い容姿であるとはいえないが姉と母にはかなわない。女としていつも負けているというか勝負になつていかない気がする。子供の頃から近所の人にしてみても、お姉ちゃんはお母さんに似てきれいで美人ねえとなり、それをじつと見ていて私はあら香摘ちゃんもかわいいわよと私の番のおきまりの文句が並べられる。でも、私は姉も母も憎いと思つたことはなかつた。もちろん近所の人も。それは自分がしようがないと思つていたからか、弟や父がいたからかはわからない。それが家族なのかと漠然と思つていたからのように思つ。

この仕事をするようになつて自分の事に場合を置き換えて考えるようになった。結果、自分と向き合つことにつながり、私の場合は恵まれていたんだなと単純な私はそうとしか思えない。

アイスのふたを開ける。ふたについたのをなめようか迷つたが姉と母のことを考えたのでやめた。ここは男の部屋だ。吉本家次女25

歳の女としてはやつする気分ではなかつた。

「この腹がおれの十数年の歴史。勤めはじめストレスだなんだとい
い訳しもはやこの腹では飛ぶことあたわず。豚にはなりたくないと
積み上げた歴史を否定してみたり、自虐ネタにつかってみなを笑わせ
たりもはやどうにもならないのか、まだなんとかなるのか、本当に
こいつと決別できるのか、腹を抱えて笑う。おれの腹を抱えて笑う
のはいつも香摘要。ときにぶよんぶよんのおれの腹で遊ぶ香摘要。誕生
日に食べたいものがコロッケだつていいじゃないか。風呂上りのほ
てつた身体を素っ裸になつてソファーにもたれ窓からの風を楽しむ
のが今の最高の幸せだつていいじゃないか。

「あなたはいつもそう。乾いたときの水を幸せに思つてゐる」

「乾いたときの水？」

「つまりこうよ、のどが渴いたときの水はおいしい。おなががすい
ているときの『ご飯はおいしい、熱いとき冷ます、寒いとき暖める、
忙しいとき一息ついて、眠いとき眠る』

「あなたはときどきあたりまえのことでも最高におどろいたり満足し
たりする、それが情けなくもあり、うらやましくも思つ」

「あなたは子供と老人を足したような大人だわ」

おれは話すことはあまり好きではない。子供の頃自分の声をマイ
クで話して聞いてみたり、昔はラジカセでテープに録音したりして
ラジオ番組みたいなことをしたりしたものだつたが、それが原因だ。
なにかが違つた。気に食わなかつた。自分の気に食わない自分の声
が音になつてあいてに届けられている事実。

議論は嫌いだ。人と話をするなら徹底して良いところばかりをあ
げる。否定はしない。それですむ。わざわざ話をややこしくしたく

ない。香摘はおれからなにを釣りあげようとして糸をたらしてくるのか。

「おれは自分をガキだと思うし、年寄りジミーと思つこともある。けど足して割つたなんて思わない。はじめから割れてるだけか、足しただけさ」

それでなにが生まれる。こんな会話から。おれはためされるのは嫌いだ、といおうとしてやめた。なにか言つ瞬間しばしば相手もう思つてることを言おうとすることがある。今がそつだと感じる。汝の対面に学べ。自分の対面になる人間にはなにかしらの意味がある。おれはこの言葉の意味を探ろうと、香摘はおれを探ろうとし、何かもう一つ足りない。とにかく一番いい理屈を見つけたほうが勝ちだ。

小さな部屋が一つ。窓が一つ。押し入れが一つ。台所が一つ。トイレが一つ。風呂が一つ。男ひとり。女ひとり。テーブルが一つ。テレビが一つ。時計がひとつ。眠気がひとつおしよせてきて、心だけがばらばらにいくつもあるがそれといっしょなのは箱の中の折りたたまれたいくつものティッシュと座布団。横になりつつそこまでは確認し田を見開いていた。

「議論すると眠くなるんだ」

「議論じゃないわ、しゃべってるだけ」

「頭がさ、眠くなるんだ、無駄だつていつてるんだよ脳が脳がノロッていつてるんだよ。」

「ホントみんな病気ね」

「私も病気にならつかしら、自分の話を聞いてもらえないっていうのが現代における精神的病の発端なんだつて、ねえ、聞いてる」
汝の対面、香摘の足、綺麗だ。

「自分のさ、思うとおり聞いてもらい、みたいものを見たいようにみ、理解したいように理解する。そんな病気になりたいな」

「どうしても弱いところから攻められる。大きなダムも小さなひびがもとで決壊する。そこが狙われるんだ。確かに絆も強い愛情も、

それが大きければ大きいほど強ければ強いほどそこにある弱い一点にかかる負担は破格になる」

ダムつて確かに英語で沈黙だつたか。あとで辞書を引かなければ。

「それでさ、この話題自体がおれたちの決壊につながる小さなもとだとしたら、したらだよ、やめないか」

「話題を変えよう」

そう言つて透はわたしの足をさすりほお擦りをし上のほうへももを跳ねる魚から砂漠を歩くらくだのようにわたしの上を転がつてくるのだった。

「砂漠でさあ」

私の考えをうつしたのかわからないが透がつぶやく。

「砂漠に船、いやヨットかな、帆船でもいいや、小さな絵になるようなやつ。想像してみ」

透の話題はこんなんで私の話題となにが違うのだろうと思つ。こんどは二つちが眠くなりそうだ。

「昔さ、砂漠を船で渡ろうとした冒険家がいたんだ。名前はヒッポクリトス。ギリシャとエジプトのハーフでさ、アラブにはじめて来てさ、砂漠を見て感動して、ヒッポクリトスは、また、砂漠を海にたとえた最初の人といわれていてさ。彼は実家のギリシャから船をひかせ砂漠にもつてきたんだ。彼は現地の人でも良くならない砂漠の中の砂漠それもそのど真ん中アルフラーーミニー砂漠に船をだした。

入口まではらくだにひかせていたんだけど彼は本当に船でこの砂漠を越えるつもりだった。とにかく船で砂漠を越えたい、それだけだつたんだ。熱波と砂塵、それらがいくら集まつたところで帆が軽くはためくだけで船はぴくりとも動かない。彼は船でただずつと機を待つた。だまつて日々の生活を繰り返した。アルイサク、奇跡があるときおこり、奇跡つてのは彼が砂漠を横断したことをいつんだけど、その奇跡の前にあつたのは天を雨雲が覆い突然の大雨、どこからともなく地鳴りがして鉄砲水が大きな川となり船を押し出したん

だ。船は常にその鉄砲水の先端にあり、それはまるで船が水を吐き出して進んでいくかのようだつたと現地の人は言ひ。船は目的地が見渡せる大きな砂丘の上でついに泊り水はそれとともに去つていつた。アル、イサク。奇跡がおきたと人々はいうがヒッポクリトスは平然とこう答えたという。奇跡がおきたとみながいうが私はそれを見ることができず残念だ。あなたがたには奇跡に見えるのかもしれないが、その奇跡の中にいる私には至極あたりまえな、ただの出来事の内の一つにすぎない。現に私は船の棍を取り帆を弛めたり食事をしたり、望んだ砂漠の航海が出来た点では満足しているがやつたここといえば別段変わつた事をしていわけではない」

透はそこまでいうと満足したかのようになに視線をうつしてキスをした。彼は私に覆い被さりひつくり返して抱きしめた。彼は下から抱きしめるのが好きだった。

「重いでしょ」

「いや」

「うそ」

「それがいいんだ。重いとか体重のことでなくて重みつていうか質量というか塊感というか熱といつか」

「なにそれ」

「子供の頃ぬいぐるみを抱いて寝ただろおれは男だからそんなことはなかつたけどなんかわかる。これは男とか女とか関係ない。男でも預けておけば抱いて寝るようになるよきっと」

とにかく私はされるがままになつてしまらく彼にだかれらままだつた。私が熱いといつてもまだ彼ははなしてくれない。ようやく解放されて台所で水でも飲もうとしていると彼がきてこんどは少しあさしく愛情表現をしてくれる。好きだよつていい、軽く腰に手をまわしてコップに水を取つてくれる。こんな彼とはかれこれ5年になる。おかしいこともおかしくなくなり、なにがなんだかとにかく続いている。毎日は透に言わせれば、あれだ。「よいことの積み重ねで、これでいいところまで溜めて後は貯金で生きられたら」「だつて、透

らしい。

透の抱きしめ行為はセックスとは違つた彼と私のダムの傷を埋める
ぱてみたいなもので、ふたりの5年の狂氣を静めてきた確かな行為
の一つ、形になつたひとつつの結晶だった。それについて私は満足し
ていた。

朝、目が覚めると目を開けたくない。たまたまそれが世間様のい
う、朝であったとしてこのところは1回目はちゅんちゅんかわいら
しい雀のさえずり。起きたくない。また眠りにつく。2回目、目を
覚ますのはグワグエいうカラスの鳴き声。起きたくない。そして次
に眠るともう朝は終わつている。朝の死。朝起きてもすることがな
い。1日のすることがわかる。見えるから目を開じる。とりあえず
今日もまた朝を黙殺した。昼、起きた。階段を下りるとテーブルに
書置きがあった。病院に行つてきます。あなたのことで相談に行つ
てきます。ぞつとした。母にはすることがたくさんあつた。炊事洗
濯の家事一式。パート勤め。睡眠。美容と健康。息子の心配からな
にからなにまで。小さな破片を組み上げオレとの距離は遠ざかる。
オレが抜けたらその城は崩れ去るだらうに今日もせつせつせつとオ
レへの心配を城壁に組み込み出かける。

オレは母の努力を無にしたくはないんだ。オレのいわゆる自立つて
やつがその城を破壊する。オレはずつとみていいんだ。しかしそ
の理解は一笑される。オレはやがて病院に行く約束をそれを守る
ことになるだらう。

クレモンテイル密やかに、デクレッションド禿、マドレーヌ、ママ
レード、ヤムスクロ、イワノビッチ。世界が氾濫しあれの前に広が
る。チャンネルというタクトを振るい音を奏でる。ジグザグに直線

的に斜めにはしる線。黒に光の線。黄色、蛍色。ビニをさまよつているのかどの時代をどの世界を。

わんシーズン4・5回も着れば捨ててしまうTシャツを着て車でドライブ。文句を垂れながら仕事をし、電気代だけで無料のテレビが最大の娯楽。自分の殻にとじこもり、ウエブの入った柵を囲い、時間の歯車に管理され光と闇を求める平穏と騒音を愛し心臓はひとり動きつづける。

充血する凝縮を重ねた缶コーヒーを一口する。香摘要のいうとおりおれはこれだけで満足するんだ。他愛のないことひつくりかえるんだ。飛んじまつたあいつだつてだれだつてそなんだ。気が付かないだけだ。なんで死んだんだよなんて考えれば自分がなんで生きてんのかかすかながらにわかりそうなもんだった。あきらめを甘んじて受けながら何かを期待して生きてんだ。こんなおれがいうのもおかしいが人は自然と一体になるために生きてんのかもしれないな。未来は予想がつかない。だからいいんだろう。常にそう思えればいいんだろう。現状に満足することも大事だけど未来はやっぱりどうなるかわからないし現状だつて変わつていく途中の中にある。レイテンレイレイレイレイのいちの可能性にレイを付け足す毎日じやあなくていちを付け足していく努力が毎日になくてはならない。いちを足していくのはだんだん難しくなつてくるけどやらなきゃやられる。全部自分の財産。役にたたないものまで。お腹のうぱり、頭頂部の薄さ。渋滞。

てつきりどんな攻撃も受け流す拳法の達人のような老人。もしくはフランケンシュタインのような人間離れた圧倒的な存在。そういっただけだ。なんで死んだんだよなんて考えれば自分がなんで生きてんのかかすかながらにわかりそうなもんだった。あきらめを甘んじて受けながら何かを期待して生きてんだ。こんなおれがいうのもおかしいが人は自然と一体になるために生きてんのかもしれないな。未来は予想がつかない。だからいいんだろう。常にそう思えればいいんだろう。現状に満足することも大事だけど未来はやっぱりどうなるかわからないし現状だつて変わつていく途中の中にある。レイテンレイレイレイレイのいちの可能性にレイを付け足す毎日じやあなくていちを付け足していく努力が毎日になくてはならない。いちを足していくのはだんだん難しくなつてくるけどやらなきゃやられる。全部自分の財産。役にたたないものまで。お腹のうぱり、頭頂部の薄さ。渋滞。

「名前は」

「藤原奈由多」

「住所」

「生年月日」

オレは答え、美人のカウンセラーはカルテだかに記入を続けた。それを必死に作ろうとしていた。若くて普通の人だつた。この人も恐いんだな。誰でも人と向き合ふのは恐い、初対面ならなおさらだ。それをぶち破つていけその紙を。オレの言うせりふではなかつた。

「その色本来の色というか、自分が思った色がだせればそれみんな好きです。赤でも青でも白でも黒でも」

好きな色はどう問いただつた。少しごねてみた。だいたいオレの青嫌いはそういうものだがそれは、あれ、これはあれだ。智恵子抄だかの中の言葉だ。本当の空がどうとかいうくだりと勝手に同じだとおもう。巷に氾濫しているどのイメージの青とも違う。青嫌いは好きの反面でなかなか好みの青がみつかないくせにどこにでもだれにでも好ましい色として存在しているのが気に食わないのだ。

まるでおれ自身の迷路にいるみたいだ。おれはこの状態に巻き込まれてどこにもかしこにも家族連れのぎやぎやつるさい人ごみの中こんなのはまっぴらだと思う。子供。おれの子供が出来、おれは御役御免か。地下にある宝飾店は間違つていない。おれは約束のリングを買いにいくんだ。地下から地上へ、並んでまで食堂に人がたくさん。パニック障害を起こしそうだ。おれの、おれたちの指輪が解けかかる。

まだだ。待てよ。そつと扉を開く。駐車場を見渡し落書きを目印に自らの車を見つけ乗り込む。すばやくドアをロックし誰にも付け入る隙を与えない。

時間は流れている、いつもどおりに。今日ははじめて、カウンセリング。患者との面接があるからと、朝からバタバタしていた。それでもそのはじめての面談だかのせいで仕事時間がバシッときめられているようで6時には戻れるとの事だった。

「飯でもくいに行こう」

こんな風にしかえなかつた。

いつもの自分らしくなかつたが香摘は仕事のことで手一杯で違和感など感じてはいないようだつた。職場の同僚にでも言われたかのようなあつかいで

「うん。わかつた。じゃあいってくるね」

プロポーズを日本語にしたらなんだろう。婚約宣言だらうか。よくありがちな和製英語というやつかなどと考えているうちに扉が閉められた。車の中はその時の状況と似ていた。おれだけが遠い状態へ進んでこの指輪を頼りに彼女を救い出す。まさに魔法の指輪だが。この遠い状態。理想はおれにはない。彼女にはあるのだろうか。だとしたら救い上げてもらつのはおれのほうだ。現におれは人ごみでくらくらし将来のあるべき状態を否定気味だ。おれは彼女になにを求めているのか。香摘の、女の幸せってやつはやっぱり結婚にあるなんて古めかしい男のあさはかな思い込み。希望も未来の展望もない男が将来の妻にすべてを委ねる。証の指輪。魔女に魔法を与える指輪。今日ははじめてのカウンセリングで憂鬱な頭の中を取り扱う裏技。4時。面談は終了。これから先生と面談内容についての報告。報告書をまとめて今後の対策を練る。6時には終わる。ということは30分前には会社を出てくるはずだ。おれは車を会社の駐車場に控えめに横付けした。運転席側のポケットに指輪の入った箱を入れる。トランクルームをバラの花でいっぱいにした。指輪を見せ、車を走らせ、トランクを開けバラの花束。今日び、気違ひじみた演出だつたがやらせではない。できるかぎりの最善をつくすのがおれのやりかただ。ひとつけはないが安全で穏やかな所。

「この子がどうだといつても私にははじめての患者。仕事上での経験からどうこういえる立場ではないから仕事以外一般の人としての立場から普通に接しようと決めた。黒い髪、白い顔。身長170センチ前半。やせすぎでも太つてもいい。流行の先端を一番上にしたらそれからあえて2段落とした感じの服装に髪型。充分すぎるくらい普通なみため。顔立ちも整っている。が、おかしな存在感。ぎくしゃくしている。場の空気によことん溶け込んでみたり、くつきり真逆に浮き出たり。私と向き合う前にするかと戦っている感じをうけるが、悪くない。神経質な人間はいくらでもいる。前の職場の上司がそうだった。ぴりぴり、かりかり。口うるさく、細かく、自分の正しさを周りにも要求した。彼はまだいい。まったく悪くないと思った。のだが。

時に自分をさらしすぎ、時にまつたく殻に閉じこもり消えてしまう。彼は弱さを認めているし、強さを知っている。まつ、ちょっと買いがぶりか、割とすんなりといってほつとしているせいもあるが、彼は悪い匂いを発していない。腐りきってもないし腐りかけてもない。さあ、あとはこれをどうリポートするか。

「先生、あの子は大丈夫なんじゃあないかと思います」

「ええ。それはよかったです。私は見たわけではないのでわかりませんので、どう大丈夫なのかを貴方なりにでかまいません、レポートしてください」

香摘要で迎えに行くとメールを入れたら遅くなりそうとのことだつた。で、しかたなく人気のない安全で穏やかな現場の下見に出た。何回かメールのやりとりをしてうるさがられたのか今日は本当に遅くなりそうなので飯食いに行くのは無しとのことだった。院長に少し話があるとかんとかで、おれは車を海辺の路伝いに止め付近をぶらぶらしだした。夕日は絶景だった。海はきらきらしていた。風

は心地よくたまに通る車の排気ガスをかき消した。この堤防に座つて二人並んで話をするつもりだった。夏祭り用のラムネを2本クラーボックスに用意していた。仮に今ここに香摘要いでぶつけ本番だったとしてもおれはうまくやれるに違いないと、いや、うまくやるやらないじゃなく、結果がすべて。か、とにかく、うまくいくだろう。おれのほうはそれを確認しただけで汗をかいたかいはつた。やがて日が沈み今日の時を本当に逸したのだと確認できたはずのおれはなぜかそこを離れる気にはなれないのだった。ここは境界だ。ここは今のおれの独身生活の良いところすべて。車とその中のもの、おれのすべての持物の良いものだけ。結婚してもここを離れるわけじゃない。堤防の石はちょうどよい冷たさと適度な硬い刺激で仰向けになると考えもそこそこそのまま眠りにはいった。

面接が終わり、次の予定を組み、帰路へ着いた。家では母が待つているだろうと思つと直ぐには帰るきはしなかつた。今日はまるでそれなりの「こちそつが」でるに違いない。たまらなくいやだ。しかし街ではまともなものを食わせてくれる店なんて一軒だつてありはない。そんな店はつぶれていくか、どこかの金持ちや政治家連中だけのためにあるのだろう。オレのためにはない。オレのためにはない家があるか。と、ため息をつく。すばらしい家。反発し失敗。店屋から出てつづくぞう思つ。天丼の何たるかなんてわかっていない、いや、どうでもいいんだ。そしてその値段。大手のチエーン店だからその値段を堂々とつけていられる。特製なんて名前付けやがつて注文時一まで恥をかかせる。これを食つ客がオレで売上の一分に貢献してこれを売つてる店と働く従業員がいて生活して、最悪だ。味方した。金を使ってやつらに正義を与えた。わづかでも。やつらはまちがつてるんだ。やつらは治さなければならない。それをわかつていてわかつていてオレは。家に金を使わせて店に金を使う。逆な

んだ。敵に塙を送る余裕はない。家は、オレのなんだ。家を家族を否定してこの世の大抵のオレの目に入る部門を排除すればなにが残る。何ができる。失敗だ。また失敗だ。敵に味方した。とにかく今日はそうだ。後悔だ。だから、家に帰ればよかつたのか。

黙つて直帰してカウンセラーを受けてきました。記念パーティーの主役の座に収まればよかつたのか。よかつたのだ。今のオレはそれを甘んじて受けなければならないのだ。我慢すればすべてを今日のすべてでは我慢にあつたのだ。心を捨てて故に感情に流されず迷わず一日を堆肥に変えなければならなかつたのだ。オレ以外の世界はうまくまわる。そうすれば、味方に稼ぎを敵にマイナスを。

オレはゼロでいい。つねにゼロで、ゼロ発進できることは車の免許のないオレでもわかるんだ。ギアはどこにあるのか。一速か二速か。あたりをくらくらして近所の日を避けるようにして帰りたかつた。日が暮れて暗くなるまで待たねばならなかつた家はオレの迷路の行き止まり。

ぶんぶんづむせえ音で目をさます。まだ目を閉じている。同じ音。同じ周期。一台のバイクがこの辺りをぐるぐる周つているようだ。何分かおきにぶんぶか音を立てて走り去る。辺りは真っ暗で人気はなく街灯も限られていた。起き上がり、何度目かのぶんぶんの登場に腹を立てたおれはもうすでにやろうと決めていた。おそらく目が覚めて一回目で半分以上、2回目で意を決していた。やつが助かるのは次の周に周つてこなかつた時だけだと鉄パイプを拾つた。誰も見るものはない。おれは隠れ右の手の平にパイプの底をあてがい左手で中央から少し上を持つてバイクを待つた。今度は起きている。おれはだまつちあいない。バイクに向かつて槍投げの選手のように投げてやるんだ。バイクは音に比例して速度が速いわけではない。バイクはちょうど暗がりをでて街灯のしたを通り抜ける瞬間だつた。

前輪のスパークだかブレーキだかの隙間にパイプをはさんでやつた。そこを軸としてバイクは前転しファミコンのゲームみたいな動きだつた。違いはメットをしていないことぐらいだと思った。バイクがひとり死にさらす機会をさらし、チャンスをおれはものにした。それはそれは静かな夜で月の夜の明かりが何か周りの音を吸い取つてくれているかのようだった。

「ただいまー」
「おかえり」「ね、どこいつてたの」「海」「うみー。えー、私も行きたかった」「だろ、だから誘つたのに」「えー、じゃあもう誘つてくれないの」「それなんかキヤバっぽい」「キヤバつて」「キヤバクラの女の子」「まじで」「ばれた」「私、昔キヤバいたもーん」「まじで」

お互い疲れているのがわかつた。こんなときはじつとつのよつな会話がくすくす笑えるうちに寝るに限る。そうしてHして中で出されて子供が出来たらどうするの。バイクに乗つてどこまでも。相手の殻を強引にでも破つて入つていかないと、表面だけの付き合いじゃあ意味がないもの。海の匂いを引っ張って来た。嫌がられるかも、飽きられるかも、それでもいくの。過去を引きずつていつたい誰と

いるのか、この言葉を発するのは誰か。この考えをもつのは誰か。

2

長期計画がある。練り上げた設計書がある。さあそれを明日発表。明日から開始。眠れない。明日からをあれこれ想像してみる。眠れない。

このままいつそ起きていようか。それでも明日はくる。が、こない気もする。眠っていたときか、そうでないときか、とにかく、明日でないときのことだった。一瞬の閃きが時を把握させる。時計の一秒が一秒を押し付ける。あつという間にできあがった。明日がこんなうちにしあがつた。一晩で仕上げた計画。閃きによる発想書。今までのものとは別なものになった。

明日を今日として認識した朝。発表と開始の玄関を開ける。びつとした刺激をもろともせず金属の握りを押し込むと院外にだた。さらに外へ続くドアは無くこの世の限界を感じた。とにかくここが今の外側で最前線。自分の意志とは関係なく自分の敵に味方するものが嫌だ。だから引きこもり何もしたくない。最近は捨てられるのもを選んで買うようになった。そういう近況報告を繰り返すことが大事なのだそうだ。

「あなたの敵はだれ」「何人で」「何歳で」「男か女か」

「何を買ひ何を捨てたか」

私はそういうながらその問いを活字にしてプリントで印字して彼に渡した。

「患者に興味を持つ」とはいいことです。ですが今日はあくまで事務的に行きましょつ。感情を捨てて常に急いで、業務の山を貴方の頭が千の蟻になつたつもりができるだけ早く崩して穴に埋めるのです」

今日のテーマがそつだつた。

「率直にいづと、それじやあ貴方の味方は見捨てられてつぎつぎと倒れていく。あなたは引きこもる。あなたは何もしない。無力な作業をあなたはしない。あなたは生きている。味方に期待しないからなのか期待しているのかどちらでもいい。あなたは何もしない。味方に味方しない。事態が好転する奇跡があつたとしても味わえない。味方の小さな勝利さえ教えてもらえない。この世に完全な勝利は無く。完全な敵はいない。」

仕事だとなんでも言える。そもそも何であんたにそんなこと言われる筋合があるんだよといわれれば仕事上の事ですと言つしかない。何もいえた義理ではない。自分にすらこんな意見をあえて述べはない。自分が傷つくことを知つてているから。

「先生言つすぎでしようか」

責任転嫁を求めている自分がいる。

「まあ、様子をみましょつ。次に彼が診断にくるかどうかまづはそれからです」

先生の余裕が私の甘えを許さないような気がしてならない。だからといってその不安を今日の彼への言葉にぶつけたわけではない。私の不安の行き先は透に通っていたのを私は知っていた。

この行動が次の結果を生み次の行動に結果に繋がる。オレは輪っかを極力シンプルで自分のわかる範囲に抑えたかった。しかし腐りきったチエーンは解けるに違ひなかつた。新しい輪っかのためにまた走り出さねばならなかつた。こいつは駄目だ。また終わつた。また自ら問題を発生させ処理し、その処理のための問題を解決し、ながらも輪っかに対してのこだわりから以前のものよりも強固にかつシンプルにしあげなければ意味が無い。ふうう。

「オレには記憶が無いんです。本とか映画とか見ます。でもあれなんです、よく語り合つじやあないですか、本の内容とか映画の感想とか。本当に見終わつた直後ならいいんですけど、もう一三日もすればそれについて話せないんです。主人公がどうとかストーリーがいまいちとか言つじやないですかみんな。それがなくなるんです。本当はみんな誰かに語るためにそれらを見てんじやあないかつて疑つているんですけど先生はどうですか？」

「ん、それは誰かと内容や感想を語るために本や映画を見るかって事。いい本とか映画だつたら自然に心に何か残るんじやないかなそれは何日後でも関係ない」

しかしそれに本当にすがつて生きているものにとつてはもはや記憶などなくなるんですよ先生。どんな感動もどんな新鮮さも薄れ消え行く。だから次を求めていかなければならず、

「ねつなんかあるでしょ好きな映画とか本とか」

「思い出しても次までの宿題」

記憶がとぎれとぎれ、紙切れに印刷された問い合わせに答える次の診断にもつていく。

それでどうなるか。幸い不眠症とは無縁。よく眠りにつく。しかし
これも本当の眠りが出来ていなければ何度も眠りにつくんだろうか、
なんて考えの中でも眠りにつける。次の舞台まで眠った。ネタは宿
題で充分。ほかにすることもなし。

バラの死骸は無残で彼女の老後を感じさせた。それを包む新聞紙は
自分で、もつとも意味の無いものに感じた。最初はきちんと織り込
んでいたが面倒くさくなりコンビニの袋に丸めて入れた。パンパン
に膨らんだそれを次の燃えるごみの日まで家で寝かせておく気には
ならず夜の町にドライブに出かけなじみのコンビニのごみ箱に投入
した。ごみ箱もコンビエンントなんですねなんて冗談を店員と交わし
たかったが誰も見ていなかつた。静かな夜は好きだ。きっと月はで
ている。見なくともわかつた。方向はつかめている。常にそれだけ
はしかつりしておきたいんだ。キミと一緒にいたいんだ。キミに見
ていて欲しいんだ。帰り道での練習の成果。誰も皆話すことは決め
ているんだ。一度頭の中で反芻したことでなければ話せない。だか
らといって味気ないなんて思わないでくれ。香摘要、キミが好きなん
だ。

「あら、溶けたアイスをわざわざ買つてきたの」

「ああ、このアイスを君だと思ってひざの上で温めていたのを」

「よくわかんないけど一人でこんなことする意味あるのかな」

「こんな事つて

「よくわかんないわ。さつきりいつて」

「何も生み出せない」

「やはり何かを生み出すなくてはいけないんじゃがないのかな」

「なに」

「なにそれ」

「子供のひとこいつたんの」

「だまつてないでなんとかいつたら」

なんだか良くなきゃわからない本當だ。向かつて帰った。向かつていた帰り路はどこにいったのか。おれはどこに迷ついたのか。時間を間違えましたまだ開店じゃありませんでしたね。コンビニなんていかねばよかつた。おれの変てこなトークが憎くて仕方なかつた。必殺技が出せないアーメの主人公の気分だつた。

「今度旅行にでもいかないか」

当ての無い問いかけが精一杯だつた。もうおれにはプロポーズという難題をどうやって解決するかしか頭に入らなかつた。

「いいけど

「いつもみたいに急のはやめてね、前日とか翌日とかじやなくてせめて一週間前、やつぱり2週間かな」

「それに旅行の楽しみは計画する段階にもあるつて、この前トレーピングやつてた」

「やつてたね」

「あなたには計画性つてものがないの、今日も突然にコンビニなんかいつたりして」

「そりゃコンビニだから、計画もなくそもそもないよ」

「そう。だから例えば話。今までの旅行。前回のデート。その前も。」

「そうだつたね」

「何よ」

「おれと結婚してくれないか」

「香摘。おれには明日のことなどわかりはしない。誰だつてそんなんだろうけど。おれはわかりはしないものに思いはかけない。努力しないつていうか。計画がないよ。お前のいうとおりだ。」

「お前が教えてくれよ、おれに。明日を。計画を練る意味を、その価値を。」

「なあ。」

うれしいはずだった。くるべきものがきた。いざればそうなるだろうと漠然と思っていた。ただあまりにも突然だつた。

意表をつかれてうれしいものとそうでないものがあつて、今回はやうでないものの気がした。いや透といる限りいつもそうだつた。よくわからないが女の子は来る来るとわかつていてやっぱり来るのがうれしいものだ。と思う。私はそうでもないが最後ぐらいはプロポーズが最後なのかはしらないけれど、しつかりして欲しかつた。それが透の男としての弱さで苦労してきた部分に違ひなかつた。透は絶対嘘はつかない。つこうと思えばつけるんだろう。ただそうした場合、透はつきとおさだらう。そして最終的にそれが無理なことを知っている。透の嘘をつかないための気遣いはすごい。正直、私が望んでいるやりかたで別の男がきたとして、うれしいんだけど、

その男とはつまらない自信がある。私が我慢すればいいこと、女が女らしく我慢してあげるところともいえるが、そういうことは苦手だ。男は自分で積み上げておいて女の裏でのしたり顔にたいして大抵は後でぶちきれる時が来る。本当に気づいていない男を最後までだます自身は私には無いし、ある程度はお互いの男らしい振る舞いと女の需要を大人のやりとりで取り繕つたとしても限界がある。男は絶対に切れる。自分から仕掛けたゲームを放り出すときが来るので。

「一応。うん。つていつとく」

「今度の旅行楽しみにしてるから」

しおりしくてかれたような声に自分でびっくりした。
これが私がと思った。

一応なんて言葉、誰かが言つてるの聞いてすぐ腹が立つせにこんなとき使つてる。まだ試すように。透がちゃんとしてくれるので待つてている。その時の嘘の言葉を、作られた構成と演出を私はやつぱり欲しいのだ。でも透だから、わかつて欲しい。

好きな言葉・墓穴を掘る

「何これ」

「好きな言葉です。言葉つて言つかことわざつて言つか。すごい言葉ですよね。最近この言葉を再発見してうれしいというかなんというかとにかく誰かに話して聞かせたくて。ちょうど先生言つてたじゃないですかなんでもいい好きな映画とか本とか。否定的じゃなくて嫌いなものじゃなくて除外するものでないものを宿題にするつて

確かにそういうふうないわないうような

「奈由多君、それでなぜその言葉がすきなの聞かせて」

彼はこんなことのために診断にきたのか、こんなことを語るためにあんなに目を輝かせるのか、私にはわからないが彼の話が終わつた後私はドアを開けて家に帰りたくなつた。彼は満足し私は不安になりはつきりしない立場のままじゃあまた今度といい。彼が先に診察室をでていってくれてほつとした。

「たつたそれだけのことが彼には大事なことだつたんだね。彼にはそれしかよりどころがないといつてもいい。」

「カウンセリングを受けること、好きなものをみつけてくること、それを君に話すこと」

「彼は今日三つの勝利を手に入れて帰つていった。」

「ただ家にいたらゼロだつた、毎回ここに来るだけだつたら一つだけたすきなものを。見つけるだけならそれも一つだつた。」

「でも今日は私が感じるだけで三つもの成果を上げている。本人にしてみればそれ以上のものかもしれない」

「君のおかげだよ。彼はいい傾向にあるといえるよ」「結婚したからってなにもすぐによめることはない」

「彼がその、そういうしているのかい」

「やめたいと」

「いえ」

「その」

「私、この仕事むいていないというか、」

「はい」

「わかった。無理はできないからな
「そのかわり」こちらにも都合がある
「来月まで待つてくれないか」

「わかりました」

いろいろ問題がある。早くここから逃げなければと思ひ。ここでの仕事をやめて、透と旅行について、子供。それはそれで問題か。他の人はどうやっているのだろう。余り先を見ず成り行きに任せているのだろうか。それでいてそのことを忘れて愚痴をこぼしてみたりするのだろうか。

私は逃げている。いや逃げたい。子供からをしてそれは奈由多君から。私にはわかる。奈由多君が私に向かってくる。彼には私しか見えていないような気がする。私は彼の母だ。しかし彼はそうは思わない。私も直面している問題は同じだ。ただ見ようとしない。だけだ。

「おー奈由多。」の箱たのむ

「はい」

「しかしあれじゃのいきなり週4はつりこべ」

「いえべつに」

「なんかほしいもんでもあるん」

「そんなんじやないです」

「だよな」

「あーあれな、おれの話かた変だけどきにせんとこでな」

「はい」

「すなおじやの一」

「直樹さんこいつち箱もですか」

「おー頼む

とりあえずなにかしなければ、働かなければこう思って驅られた。近所の、といつても駅でふた駅ほどの場所にあるコンビニのバイトに応募した。電話をかけて履歴書を書いて簡単な面接をしてそのまますぐに仕事に入った。本当は駄目なのだけれどと言つて直樹さんに捨てるための弁当をもらつた。それを隠しておこて帰りにもつてかかる。家にあまりいたくないのだといつとおりおきの場所だと教えられた。コンビニの裏口からでてビルとビルの間の細い隙間。

「そこの隙間通り抜けてみて

「なにもありませんが」

「だまされたと思つてるだろ」

「こつしょにきてみこ

「かりにな。かりにだ。誰かがこじをとおるだろ」

「なにも氣づかない」

「左向いて上みてみ」

そういつてそつちを向かせた直樹は逆を向いて

「ちょい危ない」

片足が影を作つた。ぶわっと服のこすれる音がし、自分の前から消えた。向こう側にいつたのだ。

「後ろに踏み台あるだろそれつかつてこつちこれんのよ」

声だけがした。

「いいだろ」ほんとはおっさん達とタバコ吸つてんだけどあの通路で、でもさせまくよそれに飽きてさ、なんかさ登れそうでだから飛び乗つたらよ奥にこられた。

「土」

「おつ」「ひ」

「こじはオレの第一公園。最高に落ち着くぜ

2メートルほど壁を背に両脇の建物には窓も無く軒の下にいれば
せつと空が見えるくらいで雨もしげしげ。向こう側は段段狭くな
りついこじらかの家とも知れず吸収されて行き止まりだ。

「まさか直樹さんここに住んでるんじゃ

なにかマットのような敷物がしかれ棚のようなものができていた。

「馬鹿おまえそれ本氣

「たまに来るんだよたまに」

「それって第一つて第二とか第三とかあつてそーを転々としている
わけじやあないんですね」

「ないんだよ」

「しつかしお前おれがそんな風にみえるか

「いえ、でも、おかしくはないかなと」

「ん ん。まあいい」

「お前も気に入つたね。じいじめ治安もいいからまずまちがいもな
い」

「おれらだけだ」

「田辺さんにも教えようと思つたけどなあそこ超えらんないだろ
うと思つてよ」

「他ほおばひやんばかりだし店長と娘にもなあなんかいわれそ
うだ

し」

「奈由多きたからさ。ホントつれしこのよ

「ほり家帰りにくいんだろ、弁当もあるし金も使わなくていいじゃ
ん、居場所つーか安全地帯よここは」

「こずれ最初は指導係りとか言つてるけど店長もおれとお前組ませ
ようとしないだらつし、若い一人を信用してなこのよなんだかんだ
でわ」

「そんときはさ、使つてこいから

「あたまにはおれと一人つきりになるときもあるナビセやれはい

いだろ先輩としてセーイの

「ええ。まあ」

「でも、ここ いいですね」

ほんとにいい。

澄んだ空との土地を比較させて楽しむんだ。オレはここち側にいるよつてことに安心して汚れていられる。塵も誇りも分解して見えなくする。オレの突いた手のひらのどこか薄い膜を食らわせて一つになる汚れ。ぼろぼろになるまで擦り切れたジーンズにここが唯一の呼吸口だつてことはわからないがせめて青い煙突はオレを通して空につなげてやるんだ。ここがオレの墓ならば本当に是非もない向かう先はきまってる。落ちる先も決まってる。わかりやすいじゃないか。迷わなくてすむ。

「おい」

「 もどるわ」

「休憩終わりだ」

「奈由美

仕事の合間を縫つて旅行会社の扉を開く。受付の讓はまるで旅行とは無縁。淡々と事務をこなす。いまどき国内の温泉旅行などはやらないかもしれない。ご両親へのプレゼントですかなんていわれそうだ。静かで落ち着いた少々値段は張つてかまいません。趣のある雑でない。

「ええ料理とかはそれほど食べるほうではないのでかまいません」

「はい」

「ええ」

「それじゃあ」

「いい」と

「いい」

「後で見積もりもらえれば相談して決めますんで」

手に一、三のパンフレットと電話番号をもつて旅行会社をでた。ふたりで旅行したことなんかあつただろうか。香摘。なんだかんだでディズニーランドいきたいなんていわないだろうか。そうしたらおれはどうするんだろうか。いつて見るのも悪くないか。香摘がいきたいんならそこが一番だろう。人がたくさんいて。子供がいて。騒がしくて。人の波なんてよくいったものだがそういうのはどうしうもなくつらいもだけれどもそこにいくことで何かを確認できるとすればそこの意味がそこにあるんだろう。おれは見えないものを見ようとしている。疲れている。見えるものだけ見ればいいんだ。なにも温泉なんて本当だ。年取つてからいけばいいところだ。もつと普通の当たり前の事に疲れるんだ。

こんなパンフと電話番号はある旅行会社の中だけのこと。おれの気持ちの一瞬の思いにすぎない。帰つたら二人で考えよう。なにもこんなパンフなんか見積もりなんか必要ない。それでいつたいおれは何をしているんだろう。

おれは黙つて家に帰るんだ。それで待つていればいいんだ。それで動く必要ないじやないか。香摘は仕事をやめるつていつていた。そうしたら今度は香摘があれを待つてになる。慣れておくのもいいもんだ。おれがいまふらふらしてどうする。まるで家に痛くないみたいじやないか。不安があるみたいじやないか。自信が本当にないわけじやがないんだ。ただ、空元気を出す氣がないだけだ。あるものは一人の未来とひとりの孤独。見えるものは一人の未来で見えないものはひとりの孤独。空の青が見えて宇宙の黒は見えないもの。青信号が見えれば左右の確認は必要ない。賞味期限には従うこと。値札は値札。ものの価値。

過去の繋がりの流れ。今の流れ。未来へ繋がる流れ。どれだ、いまはどれだ。どこにいる。

花を両手でいじるように目を閉じた。自分が香摘の両手を使って自分の両手がきっと香摘のそれになつてている。うまく包み込んで花

を閉じ込めるようにして痛くないようにと覆い隠してもぎ取る。何のためかはしひれずそこまでしておいて、残酷。遠くで案の定自分の両腕両足をもつた番摘がそれをみている。おれはただ首をまげ声も出せず鼻から空氣を吸いこみ吐き出しながら首をもとに戻した。おれの手には花びらがばらばらと握り締められ零れ落ちるのを待っている。花びらを後に残し歩いていく。そのうちひざががくがくしだして前のめりに倒れこむ。やわらかく着地。あたりは真っ白だった。やわらかな白だった。思うような場所だった。思うようになつたはじめはひざをついていたのだが頭からもぐりこむことも出来た。地面いっぱいに広がった。背中をひねつて水鏡。さっきの花びらがくすぐつたかった。

「是是非非、非非是是」

「風風雷電、雷電風風」

自転車を買った。バイトへの行き来をまかなえるよつになった。

「物を買つたために働いてるよつなもんだ、若いつちはそれでいい」

「その内そうじやなくなる」

「そうじやなくなるつて どうなるんすか」

直樹が聞いた。

今日は日勤のおばちゃんが休暇をとつたため店長田川店にて出ていた。直樹の仕事は夜勤が主だが前倒しになつていた。

オレも少し早くの出勤だった。

颯爽と愛車をおり駐輪所につないで息を整え制服に着替え舞台に登場した矢先だった。

「奈由多 その自転車どこで買った」

「えつと、うら路地云つて駅いく道ありますよね、その出っ鼻の区画にある自転車屋」

「お前らなにか物買つときどこで買つかとか気にしないだろ」

「同じ値段で同じ性能だったらなおさら」

「おじいちゃんやお父ちゃんが、おもてなしで飲んでいた配達車で、おしゃべりを始めた

「まあいい」

「直樹と話してたのをやつこいつにじょうやな」

「奈由多も来たからちゅうつけな」

「たとえばその自転車盗まれたら悔しこだらつ」

「その自転車不良品だつたら」

「その自転車本來ただ同然なものだつたら」

「奈由多が苦労して稼いだ金で買った自転車馬鹿にされたら」

「店長なにがいいたいんすか」

直樹がいつ。

「んーとな、そうだな」

「たとえば、お前らはこれからここでバイトしてこずれやめてこへ

「時給云々もあるしだぶん金が続かなくなる」

「やつたくてやつている仕事ではない」

「まあ、こいつかのバイトの中での選択肢の一つとして選んだだけ

だ」

「お前らはその内、ひとつぐらいをこなすとかね」

「実際、直樹はやつしたよな」

「直樹、女できたか」

店長は返事も続けず次を続けた。お姉はきそつもない。

「で、安易にバンドやるなんてお前はこはなにだらつ」

「専門学校通りでじゅうつも言わないだら」

「どつなんだ オレはお前に聞きたい。じゅう思つてんだ

「じゅうて何が」

「おまえ自身の今後についてだよ」

「店長」

「そこぐらい逃げてもよくなない？」

「店長答えだしてんジャン」

「未来ないです」

「見たくないです」

「今を必死にやるだけです」

「家賃を払つて水道ガス光熱費、携帯、食費、年金税金云々」

「店長、おれの将来のために首にしてくれるつていうんですか？」

「つらみませんよ、感謝もしないけど」

それっきり会話がなくなつた。

客が来て時間がたち店長は帰り直樹と一人で夜勤番をしていた。

「店長今日なにいいたかったんでしょうね」

「ああ、あれか」

直樹は何かもつとありそつだつたが
「娘に悪い虫がつきそつで、それがおれ等みたいんならつて考えて
ハつ当たりだろ」「
と、そつけなかつた。

その後、直樹は夜勤の早上がりをして次の飲み屋のバイトにでかけ
ていつた。

また、店長がやつてきてなにかいつのかと思つてきやそのまま黙つて
ぶり返しはしなかつた。

「ひとりぐらじつて大変何すね」

と、店長に言つと。

「ああ、やうだな。まあこじだけのバイトじゃあやつてはいけない
からな」

「普通に暮らすだけで精一杯、その内何か問題あれば全部がだめに
なる」

「何かつて？」

「別に犯罪とかそういうのを言つてんじゃない怪我とか病気とかだつてそういうのに入る」

「今日、おれが直樹を首にして、次のバイト先の店屋が火事で焼けちやつたらあいつはどうなる」

「あいつは来月までに次のバイトを探すとこれからはじめなくちやあいけない」

「あいつは如才なくやるかもしれないしやれるだらうが人知れづ氣苦労はあるもんだよ」

「今度のバイト先は遠くの場所になるかもしれない」

「交通費もかかり、残業もせられかかけもちなんかできなくなるかもしれない」

「そういうの考えないんだらうな」といつて突然オレのほうを向いた。

「こまの若いやつはついて」とですか「考えることを逃げてるように見えるんですね」

「見切つてるんですよ駄目だつて」

「考えて駄目だじゃなくて」

「店長もいつてたとおりどうしようもないんだすよ」「店長も答えだせないでしょ」

「おれ等も出せない」

「だから今に居るか、次にいくしかない」

「時計の針と同じですね、なんか」

「別にそつちを馬鹿にしてるわけじゃないんですね」「すう」といですよねそつちの世界は、すうことして回ってる

「あれですよ まだいいのかもしれないですよ」「バンドやってんだとか専門学校とか言つてゐるほうが

「直樹さんはそれすら見切つてる感じですよね」

「だからといって何をするわけでもなく」

「今日みたいな一番きついんじゃないんですかね」

帰りに特別に弁当をもらい朝の町を自転車で走る。吸殻、カラス、ごみ袋、朝日。新聞紙、名刺。茶色のおっちゃん。すこしだけこの町を制覇した感がする瞬間だった。しかしもうすぐすればこの下層世界の上にコンクリートが流し込まれ人が闊歩し車が行きかう。シンデレラは時間までに帰らなければならない。だれにも見つかってはならない。

「風風雷雷、雷雷風風」

風よ吹け雷よ落ちろ、めつためつたにぶち壊れればいいのに。どうでもいいのに。

「是是非非、非非是是」

こんな途上じやメールも電話も携帯に届きやしない。

望まないものを作る。必ずしもそういう強く望んでいるわけではない。どっちもどっちだ。だが進もうとする。後でぶり返す。

香摘要が仕事帰りのおれを迎えてくれた。昨日もそうだった。

おとといもそうだった。

食事が用意されており料理の本も増えたようだ。

「家に居ても太つたら駄目だぜ」

なんて言つてみた。

やがてなにかが不安になり、このままでは済まされない気がしていく

るのだろうか。

どちらかがいいだすのか。それが負けとか勝ちとかではないが、いずれ未来の原因の種になる。

それを恐れている。未来は明るくない。今まで手いっぱいの気がする。

今まで十分な気がする。なにをこれ以上望むのか。

そして逃げた。

金沢は雪だった。

駅構内の雑貨屋で香摘要がマフラーを買っててくれた。
おれが旅の計画に悩んでいたといつかあなたが話してた一人旅で
つた金沢がいいということになった。

10年もたつとすっかり事情が変わっていた。

駅前はまるで別の町だった。

しかし玄関を出ると観光名所は懐かしい言葉と風景だった。
あのときも雪だった。鱈鮓の弁当の幟を見ながらなんで一人旅にで
たのかを思い出そうとしていた。

人に歴史ありか。

思い出せずにやにやしていると香摘要が腕を組んできた。

「ああ、この雪が接着剤で取れなくなつたら困るね」
ばつと離れられたら寒かつた。

「寒いよ」

「でしょ」

一度あると認識して暖かさを味わうともう駄目だ。

「寒い」

そしてバスに乗り込みバスつていいなと話していた。

部屋を出でくるとき居間の机の上に結婚指輪の箱を上げてきた。忘
れ物をしたと嘘をつけ一人部屋に細工した。

こころは飛んでいた。

同じ石ころに座り込んでお茶をした。

「間違いないこの石は動かないで」と云った

「ほんと」

「ほんとさ。ちゃんと写真とつておいてくれ

タベには温泉宿を取つた。ひつそりとした離れのある旅館で温泉街のそこは静かだつた。

部屋つきの露天風呂もあり湯気が雪を溶かしていくのが楽しかつた。

そしておれは酔つていた。

久しぶりによいよいかたでこれはいけるぞと思つた。
際限なく飲んだ。ゆっくりゆっくり時間が流れればとゆっくり飲んだ。

まったくの独りよがりだが香摘は何も文句は言わなかつた。
勝手に隣にすわらせ肩を抱きおれは香摘など見ていなかつた。

おれは惨めなのかなどといいそつになつた。

じゃあ香摘はどうなるのか。

ようやく彼は私を見

今何時だとたずねた。

透は瀕死の域に達していた。

誰が正常なのかもわからぬし、そんなやつらを好きになれるかどうかわからぬ。

あきらめ。

完全でない世界を完全にするために君がいるんじゃない。

いいことも悪いこともあつたろ。どんなにががんばつてもいいこともわるいこともあつただろ。がっかりだろ。

ちっちゃな世界でつかい図体したいい大人が大きな荷物をもつて鬼ごっこ。

やめた病院の院長がいつていた。

だれでもなにかしゃべれば予言になるんだらつか

透は楽しい風になんてしなくていいといふ。

いまの若いやつらはなんていい方をする。

場の空氣を作らうとする。意図が見えた時点では興ざめだといふ。

白けてなにがわるい。沈黙がそんなにいやか。

「10時15分」

こんなに歩いたのはいつ以来だらう。半供のこの遠足を思い出す。食べたいものも選んで食べる。

デザートの生クリームの上に乗せられたミントの葉っぱを箸でよける。透はまとめて口にほおばった。

私が湯冷めに冷たい緑茶を作らうとあれこれ算段をはじめたころ彼は横になっていた。まだお酒の徳利を放さず窓辺に横たわり外を見ていた。下から這い上がるうとしている。まるで床から下の下半身ががけに落ち込んでいあるかのように見えた。

「外は寒いわ」

「ああ」

「おれもすぐ行く」

私が一人で露天風呂に向かうのをこなしていた。

何とか時代を乗り越えつつあった。互いにでもあるし単独でもそういうふうだつた。

桶を抱え外に出る。笠の葉をぬすつてみる。ぱりぱりと足元に転げ落ちた雪は冷たくなかつた。

降る雪はつきつきと湯船に解けて消えていった。

いろんなことを忘れてはじめる」ともできるだらう。疲れてなれば何度もできるだらう。

「疲れをとるには温泉だね

透がやつてきた。

湯船に顔が映る。

ゆらゆらゆれておかしい。

桶を湯船に浮かべる。

そして並んで空を見上げた。

「おれのさベスト景色つてのがあって、それはもう見れないんだ、昔の話で『めんな』

「あれはやつぱり一〇何年も昔も」とだ。おれが友達んちで飲んで自分の部屋に帰る途中の「工事現場」

「道路工事中で拡張工事つていつやつ、通行禁止になつてた。道路の街灯がオレンジできれいだつた。」

「静かな夜で雪が音もなく降つてきた。降り始めの雪でこれは朝まで積もるぞつてやつ」

「おれは道路の真ん中に仰向けになつてわ」「きれいだつたな

「寒くもなかつた」「うそ」

「黒い空から白い雪オレンジの街灯」「うそ」

「このまま死んでもいいなんてさじのことかなんてね」「うそ」

「朝まで顔に雪積もらせてわ」「うそ」

「うそ」「うそ」

「ちゃんと聞いててありがとね」「うそ」

「今日もさんざんつき合わせてありがとね」「うそ」

「なによ、どうした」「うそ」

「今も悪くないよ」「うそ」

「最高の眺めだ」「うそ」

「てつ、ビiju見てんのよ」「うそ」

「空だよ」「うそ」

「見てないでしょ」「うそ」

「家にさ指輪置いてきた」「うそ」

「はつ」

「何かを作つていくつていうかだましていくといつか

「おれについてこいなんとうそはつけないけど」

「それもうそといわなきや一番いいやり方だとは想つかば
好きだ、だからこれからもよろしく」

プロポーズというやつだ。

返事も聞かず逃げ出した。

何もいえなかつた

決まつっていたことなのかもしけない

断る理由もなかつたが

はつきりとした返事もできなかつた。

透るもそのだらう

はつきりした何かなどなく無理やりに作ったのだ。
そしてそれを嘘にしたくない。駄目にしたくない。

それは私もそうだ。

それをどう伝えるかだ。

F·i·n

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6658c/>

カフェオレと空

2010年10月11日00時37分発行